

自選 五十首

東 直子

Naoko Higashi



〔ひがし・なおこ〕一九六三年、広島県生まれ。「かばん」同人。九六年、第七回歌壇賞受賞。短歌入門書『短歌があるじゃないか』（共著）、詩歌集『回転ドアは、順番に』（穂村弘との共著）、小説『とりつくしま』、エッセイ集『今日の日ビタミン』等がある。

おねがいねって渡されているこの鍵をわたしは失くしてしまふ気がする 『春原さんのリコーダー』
 廃村を告げる活字に桃の皮ふれればにじみゆくばかり 来て

てのひらにてのひらをおくほつほつと小さなほのおともれば眠る

駅長の頬そめたあと遠ざかるハロゲン・ランプは海を知らない

「そら豆って」いいかけたままそのまんまさよならしたの さよならしたの

転居先不明の判を見つめつつ春原さんの吹くりコーダー

よい人とよい街にゆきよい花を育ててしんしん泣いたりしてね

柿の木にちっちゃな柿がすずなりで父さんわたしは不機嫌でした

遠くから見ているからね紫の帽子を被って走りなさいね

駅前のゆうぐれまつり ふくらはぎに小さいひとのぬくもりがある

そうですかきれいでしたかわたくしは小鳥を売ってくらしています

お別れの儀式は長いふあふあふあとうすみずいろのせんぶうきのはね

森の中に出かけてゆくわたしたちアーモンド・グリコを分けあいながら

ママンあれはぼくの鳥だねママンママンぼくの落とした砂じゃないよね

〔青卵〕

好きだった世界をみんな連れてゆくあなたのカヌー燃えるみずうみ

あかさたな、ほもよろを、と紅葉散りわたしの靴を明るく濡らす

怒りつつ洗うお茶わんことごとく割れてさびしい ごめんさびしい

アナ・タガ・スキ・ダ アナ・タガ・スキ・ダ ムネ・サケ・ル 夏のロビンソン

電話口でおつ、て言って前みたいにおつ、て言って言って言ってよ

夕立に帽子を濡らし帰りつくこどもは魚の匂いに充ちて

砂糖水煮詰めて想う生まれた日しずかにしずかに風が吹いてた

鶴女房の呼吸のはやさ夏空にシーツは香りながら乾きぬ

鳩は首から海こほしつつ歩みゆくみんな忘れてしまう眼をして

とうに答はミシンカタカタほのあかく見えているけどミシンカタカタ

ふたりしてひかりのように泣きました あのやわらかい草の上では

永遠に忘れてしまう一日にレモン石鹸泡立てている

遠くから来る自転車をさがしてた 春の陽、瞳、まぶしい、どなた

みんなよくわからないまま歩きだす胸がつかまって苦しい国を

縞馬の縞はてしなき風の夜の長い手紙を生きているよう

泣きながらあなたを洗うゆめをみた触角のない蝶に追われて

水をあゆむように夜の道をゆき過去をふたりでつなげてあそぶ

走りすぎて痛かった胸なぐさめる目をあけたまま空を消したい

「愛を想う」(歌画集)

五十首を選び出すために、第一歌集からじっくりと読み直していて、何度も深呼吸をしながらはならなかった。胸が塞がれてきてしかたがなかったからである。意外だった。紙に印刷された時点で、短歌は「作品」として客観的に読めるものだとずっと思っていたから。しかし、古い歌ほど読み返すことが苦しい。すっかり記憶の淵にしないでしまっていたことが、短歌の言葉によって生々しく蘇ってくるのだ。

雑誌の短歌投稿欄をきっかけに短歌を作りはじめてから、十八年の月日が流れた。短歌をはじめた頃には、まだ私の子供たちはとても幼かった。その幼さとともに、第一歌集「春原さんのリコーダー」はあったのだと改めて感じた。当時はほんとうにたくさんさんの歌が毎日生まれた。歌の巧拙はともかく、短歌を作ることに楽しくて仕方がなかったのだから。言葉が浮かべばメモを取り、家事と育児の合間にワープロで歌詞をまとめた。小さな子を育てているときの濃密な関わり合いは、なによりも強いエネルギーをもたらしていたのだ。そのことに気づいていなかった。

怠惰なる少女じわじわ涙する「たましいなんて欲しくなかった」

だいじょうぶ、と無責任に言っているわたしを恨んでいいよ、あめゆき

水が水の重さかかえて落ちてくる冗談だけが人生でした

中央線、南北線に東西線、どこへもゆけてどこへもゆかず

振子ひとつ落としたように傾いたまま灯の下に微笑んでいた

ねえ夢に母さんがいたとおいとおいとおい日の母さんがいた

うづくまる猫たちうすく目を開けるとどこでそんなにさびしくなったの

水曜日のむすめの胸はつめたくてしんしん歩くむらさきの道

レンコンの花の形を想いおり 品川、新宿、新橋、信濃

どないにもならんねえとうしろから言われるかんじに北風が吹く

わきみずのようによりそう次男坊ゆきどけみずのような三男

吾の中の暗闇少女「いろいろな未来の小石ひろってきたの」

むかで競走もつれて転びまた転び母たちみんな悲しく笑う

バラバラになった割りばし透明な袋に新しくむつみあう

はなこさんがみかんを三つ買いましたおつりはぜんぶ砂にうめます

しずくする身体がひとつ起きあがり主観だけしかいらないう言う

石鹸の最後のかけら集めたがる祖母眠らしめ海辺の町に

横顔はだれもうつくし木漏れ日のように電車の中に陽を浴ぶ

「歌集未収録作品」

毎日騒がしくあわただしく、早く落ち着いた大人の生活に戻りたいとさえ考えていた。

無邪気だったと思う。子育ても短歌も、まだ踏んでいない道、知らない場所、未来への長い時間に充ちている。苦しくなったのは、もう二度とその未知にあふれた時間には戻れないのだということを、思い知らされたからである。いつ、どんな場面で、どんな気持ちで詠んだか、また、どんな批評を受けたか、案外よく覚えていて。二十年近い年月を通して、短歌の恩寵を受けた気がする。

現代短歌の歴史の中で、修辭や技巧を考え続けてきたが、自分の人生や作品も流動する。私の場合、実人生と直結した作風ではないが、経験なくして歌は生まれえない。第二歌集を刊行してから七年が過ぎた。この間に、小説やエッセイ集を出版して散文にも力を入れてきたのだが、そろそろ腰を据えて、今の自分の短歌と向き合いたいと思う。